

老人性難聴における語音聴力検査の正答率と誤答の傾向

◎大木 愛望¹⁾、中津川 庸子¹⁾、境田 知子¹⁾、高橋 ゆき¹⁾、上道 文昭¹⁾、天野 景裕²⁾
東京医科大学病院中央検査部¹⁾、東京医科大学病院臨床検査医学科²⁾

【はじめに】老人性難聴とは加齢に伴い内耳にある感覚細胞の減少や神経の老化によって起こる感音性難聴で、高音域の閾値が上昇するのが特徴である。また語音聴力検査時に患者から「音は分かるが言葉が聞き取れない」という訴えが多く、どういった言葉が聞き取りにくいのか、またどのように間違えるのか疑問を持ち、統計を取り傾向を調べることにした。【対象】当院耳鼻咽喉科・頭頸部外科補聴器外来を2021年1～3月の間に受診している65歳以上の高齢者50人93耳（聾の耳は除く）。【方法】57-s表を用いた語音聴力検査において聞き間違えた言葉ごとの正答率を求めた。【結果】特に正答率が悪い言葉は『ね』12%、『で』16%、『せ』『ち』22%、『だ』27%であった。また、全体的に母音はあっているが子音が間違っていることが多く、特にMとN、DとR、KとT間での間違えが多かった。そして濁音はラ行（R）と聞き間違える傾向にあった。また正答率の高かった語音は『い』96%、『こ』91%、『か』89%、『よ』88%、『き』86%、『お』84%であっ

た。【考察】小寺らの論文によると、感音性難聴では有声子音（G、D、B）と鼻音（M、N）の明瞭度は低く、無声子音（K、T、S、P、H）と弾音（R）と半母音（Y、W）の明瞭度は高いということだった。正答率の悪かった『ね』『で』『だ』は感音性難聴患者には起こりやすい聞き間違えであることが論文と一致した。そのほかに正答率の悪かった言葉に『せ』『ち』があったが、老人性難聴は高音域の閾値が上昇するという特徴から、この言葉には高い周波数成分が多く含まれるのではないかと考えられる。聞き間違えをする時は有声子音同士や鼻音同士で間違える傾向にあった。しかし、無声子音でありながら他のSやTに比べ正答率の高かったKという音は無声子音の中でも低めの周波数成分が多いことが予想できる。【結語】高齢化が進む現代は我々の職域において今後ますます高齢者と接する場面が増えてくる。どういった音が聞き取りにくいのかを念頭におき、はっきりと丁寧に会話をしていくことが重要であると考え。

東京医科大学病院代表 03 (3342) 6111 内線 3201